2023-10-18

果てしなき絶景～マティスの旅と作品への反映～その 4(ニース：１)

山本 雅晴

マティスはニースに滞在する前にも何度かコート・ダ・ジュールを訪れていた。1917 年の 12 月下旬にニースのホテル・リヴァージュに逗留し、12 月 31 日にニースから 15ｋｍほどのカーニュ・シュル・メールに住むルノワールを訪れている。1918～22 年は海岸通りのパレ・ド・ラ・メディテラネの部屋を借りて、自分の所有する物品を並べてアトリエとしてモデルを雇って作品を描いた。1923 年には旧市街の海岸近くにアパルトマンを借り、アトリエを造り“オダリスク“など多数の作品を描いた。その後も主にニースを拠点にパリのアトリエも利用しつつ作品を創出した。ニースでの出会いと別れについて掻い摘んでピック・アップする。

① ルノワール(1841~1919) ：マティスが 1917 年のクリスマスのころニースに来たときは風雨が 1 週間続いた。長引く第一次大戦でうらぶれたホテル・リヴァージュに逗留し、12 月 31 日の自分の誕生日の日に批評家のベッソンと同行して初めてカーニュのルノワールに会った。76 才の老大家の前で、マティスはカチカチに緊張した。その後、人付合いのいいルノワールのもとを何度となく訪れ、リュウマチで手に絵筆をひもで縛って晩年の大作に取り組むルノワールを見て、自分も見習うべきだと固く心に誓った。ルノワールと親しく雑談する場を通して女性を描くコツやモデルとの接し方なども学び取り、マティスのその後の作品にも生かされているものと思われる。ルノワールの亡くなる 1919 年の 4 月にアンティーブに住むボナールやマルケとルノワールの家を訪ねている。

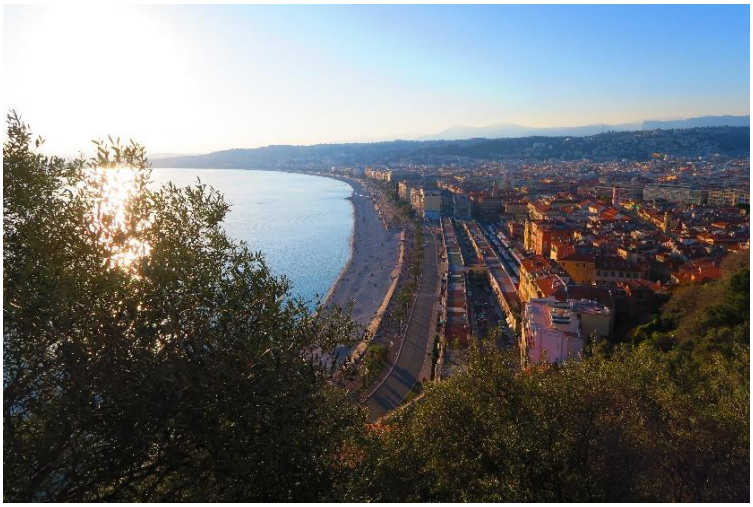


図 1　ニース 丘からの海岸と市街(2019-2)

図 2　ニースの嵐：1919～20 (マティス美術館)

図 3 ニースの花祭 2019-2-20 南北目抜き通り

図 4 ニースの花祭 1922 海岸通り（プロムナード・デザングレ）

2016 年 7 月 14 日の花火大会で海岸通りの観客に大型トラックによる暴走テロで多数の死傷者。→コース変更

小生はニースに 2008 年 5 月と 2019 年 2 月下旬に延べ 1 週間ほど滞在したが、その間は晴天で雨や風に悩まされたことはなかった。マティスが雨や嵐を経験したと記述しているが、ここでは珍しいからではなかろうか？

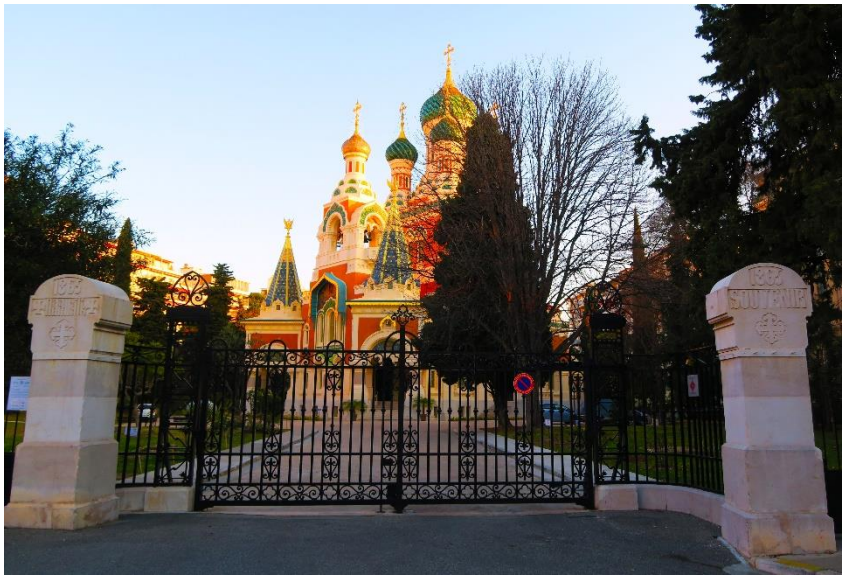
ここで、マティスの趣味について少し触れておく、① **バイオリン**：小・中学生のころから習い始めかなり上手だったらしい、次男のピエールとプロのバイオリニストに習ったり、ずっとバイオリンを趣味としていた。旅先でもその場で興じていた。アルジェのバーやルノワールの庭での村祭りなどその場を盛り上げた。絵画の中でもバイオリンがよく描かれている。② **自動車の運転**：1917 年にパリで免許を取り、ルノーの中古を買ってあちこちに出かけている。多分、ニースでもルノワールの邸宅などにしょっちゅう出かけたと記述されているが自分で運転していたのかもしれない。車中から眺めた絵画もある。

図 5 ルノワール美術館 2019-2-22 カーニュ・シュル・メール

図 6 ルノワール美術館の庭　樹齢数百年のオリーブ

ルノワールは超一流の画家だが、人付合いも良く面倒見も良かった。カイユボットの印象派コレクションの国家への遺贈の世話役として 3 年間にわたる折衝で現在のオルセー美術館所蔵品の基礎となった。また、図 6 のルノワールの邸宅の隣の樹齢数百年のオリーブの樹数十本が伐採されると知り購入して保存した。

② 1917 年のロシア革命でモスクワの邸宅と美術品や財産を革命政府に奪われた。かっての最大のスポンサーはモスクワで毛織物業で財を成したシチューキン(1854~1936)で、ドイツを経由してニースに亡命していた。



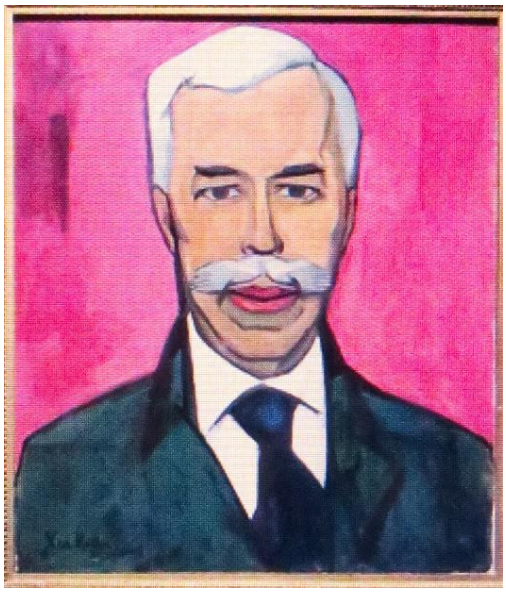


図 7 ニースのサン・ニコラ大聖堂(本国以外では最大のロシア正教会)　図 8 シチューキン肖像(1910 年頃)

当時、ニースは国際色豊かで東欧の貴族や富裕なイギリス人の避寒地としてにぎわっていた。また、ロシア革命を逃れて亡命したロシア人も多くいた。狭いニースの街でマティスとシチューキンは数年ぶりに会い、マティスは大いにお世話になった恩人にいろいろと気を使った。シチューキンはルノワールの絵も数枚蒐集していたこともあり、ルノワールの邸宅にも案内した。しかし、シチューキンは己の不遇を良しとせず何も言わずにニースを去りパリで娘と静かに暮らし 1936 年に死去した。革命政府によるコレクションの没収への抵抗は娘に託された。